

子ども健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)  
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル: Maternal pain during pregnancy dose-dependently predicts postpartum depression: Japan Environment and Children's study

和文タイトル: 妊娠中の痛みは用量依存的に母親の産後うつを予測する

ユニットセンター(UC)等名: 高知ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Journal of affective disorders

年: 2022 年 DOI: 10.1016/j.jad.2022.01.039

筆頭著者名: 重松ロカテツリ万里恵

所属 UC 名: 高知ユニットセンター

目的:

産後うつは出産後 1 年までの母親の 9~13%に発症すると報告されている。本研究で、は妊娠中の慢性的な身体の痛みと、産後うつとの関連について検討することを目的とした。

方法:

エコチル調査に参加する妊婦のうち、うつ病の既往のない妊婦について、妊娠初期と中後期の身体の痛みを 5 段階(なし、ごく軽度、軽度、中等度、重度または非常に重度)で把握し、産後うつとの関連を検討した。産後うつ傾向についてはエジンバラ産後うつ自己評価票(EPDS)を用いて評価した。産後うつの有無で対象者を 2 群に分け、痛みのあった時期により 4 群(2 時点とも痛み無し・初期のみ痛みあり・中後期のみ痛みあり・2 時点とも痛み有り)に分けて解析を行った。

結果:

対象となった 84,801 名のうち、産後うつとスクリーニングされたのは 13.6%であった。妊娠中に身体の痛みを報告したのは初期で 69%、中後期で 84%であった。妊娠初期、中後期とも、痛みが強くなると産後うつのリスクも上昇した。また全く痛みのなかった妊婦と比較して、初期か中後期のいずれかに痛みのあった妊婦は、産後うつになりやすく、初期と中後期の両方とも痛みを感じていた妊婦は 4 群の中で産後うつのリスクが最も高かった。

考察(研究の限界を含める):

痛みを抱える妊婦の割合は、慢性痛を持つ一般成人の割合より高く、多くの妊婦が妊娠初期から中後期を通して痛みを抱えていた。痛みと産後うつは密接に関連しており、痛みがより強く、また期間が長くなると、産後うつのリスクが上がる事が分かった。産後うつを早期に発見し、介入を行なうためには、妊娠中からのスクリーニングが重要であり、臨床的に痛みがその指標となる可能性があると考えられる。本研究の限界として、痛みの場所や種類は特定できず、また分娩時痛や産後の痛みも評価できていない点が挙げられる。

結論:

妊娠中の痛み強いほど産後うつの頻度が高くなるという、用量依存的な関連が見られることがわかった。また痛みを感じている期間が長くなると産後うつのリスクが上昇することが示唆された。